

12:29 真夜中になって、主はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。

12:30 それで、その夜、パロやその家臣および全エジプトが起き上がった。そして、エジプトには激しい泣き叫びが起こった。それは死人のいない家がなかったからである。

12:31 パロはその夜、モーセとアロンを呼び寄せて言った。「おまえたちもイスラエル人も立ち上がって、私の民の中から出て行け。おまえたちが言うとおりに、行って、主に仕えよ。」

12:32 おまえたちの言うとおりに、羊の群れも牛の群れも連れて出て行け。そして私のためにも祝福を祈れ。」

12:33 エジプトは、民をせき立て、強制的にその国から追い出した。人々が、「われわれもみな死んでしまう。」と言ったからである。

12:34 それで民は練り粉をまだパン種を入れないままに取り、こね鉢を着物に包み、肩にかついだ。

12:35 イスラエル人はモーセのことばどおりに行かない、エジプトから銀の飾り、金の飾り、それに着物を求めた。

12:36 主はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプトは彼らの願いを聞き入れた。こうして、彼らはエジプトからはぎ取った。

初子が殺されるというのは、パロをはじめエジプト全土に計り知れない打撃を与えることです。そしてそれ以上にここの意味は、神のひとり子である

イエス様の死の雛形であることです。この死を免れるために、イスラエルは羊を殺してその血をぬって印としたのですが、それはイエス様の雛形です。そのイエス様は神の初子と表現されてもよい、すなわちひとり子なのです。

エジプトがイスラエルを虐待した罪、何度も偽りを言ってイスラエルを去らせずに、さらに苦しめ搾取しようとしたパロの罪が、すべてこれら初子の上に報いとして降りかかったのです。これもまたイエス様の十字架を思わせるものです。

もちろんこれらの初子は、愛を持って身代わりになったわけではありません。ただ罪の報いがそこに集中したという意味においてであり、そして信仰によってイスラエルにおいては、羊がその身代わりとなったのです。

イスラエルの人々がエジプトから金や銀を求めたのは、彼らのあつかましさではなく、むしろ逆で「好意を」持たれていたからです。神の民は、虐待されるような境遇でも、神様のみこころを行うことができ、最後はすぐ出されますし、さらには善きものを受けることができるのです。そのように信じて行動しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

